第三章　8）サン・ジョアキン耕地（ジャタイー駅）

鉄道開通１７年後駅を改造 この路線駅と少し異なるジャタイー駅 (現・ルイス・アントニオ)

＊田中喜一郎、1910 年、旅順丸、熊本県下益城郡守富村出身、同駅ジャタイー耕地に配耕されるが、前述したように待遇問題に端を発し耕地側と衝突、大挙して脱耕する。（「熊本県人発展史」592 ページ）

＊松村正男、1913 年 5 月、第２雲海丸（第 5 回移民）熊本県阿蘇郡、義兄の松村新平に伴なわれて 12 歳でカナーン耕地に配耕。（「熊本県人発展史」696 ページ）

＊山下雪雄、「モジアナの土に生きる」の筆者。
山下氏の説明によるとリベイロン・プレート始発、ボン・フィン駅を経てクラビーニョス駅が終点。
大森浅寿氏説ではジャタイー駅を経てサン・ジョアキン駅、サン・ジョアキン耕地 (現ルイス・アントニオ郡) となるとイツベラーバ方面になりアロエーラ・ボニタ耕地で 420 アルケーレス、耕主はフランシスコ・ジュンケイラとエキスノト・ジュンケイラの両氏。1916 年 10 月このサン・ジョアキン耕地配耕は次の方々である。

＊鴨井一郎、河井元一、山川比吉、光藤清男の岡山県人

＊前田周次、今井梅太郎、常田熊太郎の兵庫県人

＊丹坂荘太郎、奈良県人

＊小坂信夫 1916 年 10 月、モンテビデオ丸、岡山県、当耕地に配耕最初労働は辛かった。黒奴等と一緒に生活をして行くことを苦痛に思う、実際黒奴等と共に永く働いている耕地生活を考えると、ブラジルまで来て黒奴と寝食を共にするのは之果して人類最後の目的であろうかと煩悶せざるを得ぬ。
(「今日のブラジル」651 ページ)

＊前田亀、1918 年 7 月、若狭丸、沖縄県島尻出身、カナーン耕地配耕、1946 年グァルーリョスに移転農事に至る。(「ブラジル日系紳士録」269 ページ)

＊部谷（ヒタニ）只一、1919 年 3 月　博多丸、広島県御調郡、ジャタイーに就労、後グァララペスに移転米作等 30 年、後年ジャーレス・パラナプアン植民地に再移転、綿作、牧畜を営む。
(「ブラジル日系紳士録」702 ページ)

＊樋樫嘉高、1925 年 6 月、ハワイ丸、石川県石川郡松任町出身、カナーン駅付近配耕、2 年後クァタ駅に移転、1946 年プ・プルデンテ市移転商業につく。(「ブラジル日系紳士録」)

＊折口庸男、1927 年 10 月、鎌倉丸、広島県山県郡南方村出身、配耕就労後、リンス多羅間耕地就労、聖市郊外ジュケリーにて蔬菜栽培等。(「ブラジル日系紳士録」284 ページ)

＊神保正雄、1928 年 8 月、マニラ丸、山形県米沢市上郷村出身、就労後、プ・プルデンテ郊外でじゃが芋栽培従事、1955 年サン・ジョゼ・ドス・カンポ在（「ブラジル日系」388 ページ)

＊大森浅寿、１928 年、9 月　鎌倉丸、茨城県那珂郡、サン・ジョアキン耕地面積 600 アルケーレス (1500HA) コーヒー樹 50 万本。昭和元年 (１９２６年) より入耕し始めて 40 家族 (邦人) とブラジル人、ポルトガル人、イタリア人･スペイン人、ロシア人等で 100 家族と 40 家族の邦人で合計 140 家族、石山のコーヒー樹の間を除草、当時の労働賃金は安く石山の為能率もあがらず、とてもその収入では生活することもままならず移民扱いの海外興業会社の配耕地が悪いのであり､余りにも無責任であると､同社出張所リベイロン･プレート市主任の坂元靖氏 (妻寿賀、東京都出身、渡伯 1914 年、元熊本鎮台の陸軍中佐という経歴から日本人の間では " 通称、鎮台さん ") を訪ね耕地が悪いので他の耕地へと、氏は常に日本軍隊式態度で「ブラジルはいかほど行っても同じゃ、今の耕地で辛抱出来ぬのならどこへ行っても駄目だ、戻って辛抱せぇ。」と意見されたものであった。また当時のグァタパラ耕地にもふれている。

グァタパラ耕地は今より約 50 年前日本移民が米作適地として相当入植し米作に邁進したが、このブラジル移民事業の最初のスタートに対して天は余りにも無情でブラジル移民史上かってない拓人の思いかけぬ足跡を残した土地である。

自分は昭和 5 年 (1930 年) 同地の山田氏が妻女を亡くされていたのでホンセッカ耕地 (セラ・アズール駅) の県人の一婦人をお世話致し、その結婚式のため行ったが、その当時は住宅も一時しのぎの草屋根で植民者は雑作農を営み、満ちたる生活ではなく、夕暮には蚊の群集する不気味な情景であった。その年はブラジルは不況のどん底に落ちて、農産物が暴落したので、山田氏を始め全部の人達が退散してしまったのである。
(1963 年 6 月刊「つくばね２号」17 ページ)

＊松本重見、1929 年 11 月、河内丸、熊本県菊池郡、古庄惣一の構成家族でモジアナ線カナーン耕地に 15 歳で就労。(「熊本県人発展史」843 ページ)

＊吉海謙、1929 年 1 月、サントス丸、熊本県鹿本郡山鹿市出身、ジャタイーに入耕、一農年ごリベイロン･プレート市移転現在に至る。(「ブラジル日系紳士録」733 ページ)

＊橋山信造、1930 年 7 月、滋賀県彦根市出身、カナーン駅サン・ルイス耕地に配耕、後聖市郊外イタケーラ植民地長野県人中村啓哉方の蔬菜作りに就労、転ずること十数ヶ所、後年聖市在住。
(「海を渡った近江の人たち」273 ページ)

＊金田小次郎、1930 年 3 月、ラプラタ丸、山形県西置賜郡蚕桑村出身、カナーン駅サンタ・オリンピア耕地に就労後、ノロエステ線で綿花栽培に従事する。その後パラナ州トレスバラス移住地に入植する。
(「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」346 ページ)

＊後藤正一、1930 年 7 月、神奈川丸、宮城県遠田郡涌谷町出身、構成家族に実兄末次が加わってカナーン駅カナーン耕地に配耕、義務農年 1 年石山耕地で利益なく就労、丸裸でサン・マルチーニョ耕地に移転して綿作に従事、移転を繰り返して落ち着いたのがトレスバラス移住地バルサモ区である。
(「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」611 ページ)

＊木庭勝喜、1930 年 7 月、神奈川丸、熊本県鹿本郡鹿本町今日出身、サン・ジョアキン耕地で義務農年遂行後、パウリスタ線グァリバ駅に移り綿作を 3 ヶ年。1936 年同線コレゴ・リッコ駅イタジューバに農地を 330Ha 購入して綿作に打ち込む。(「熊本県人発展史」533 ページ)

＊河奥仁三郎、1931 年、ブエノスアイレス丸、福井県勝山市北谷町出身、カナーン耕地コーヒー園就労、1944 年モジ市郊外コッケイラに種鶏場設立。(「ブラジル日系紳士録」354 ページ)

＊浜津清司、1932 年 6 月、リオ・デ・ジャネイロ丸、福島県田村郡守山町出身、ジャタイー駅サン・ジョアキン耕地で就労すること 1 ヶ年後、パウリスタ延長線に移り綿花栽培に従事、さらにパラナ州トレスバラス移住地セードロ区に入植する。(「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」406 ページ)

＊横田克義、妻日出子、1932 年 8 月、ブエノス･アイレス丸、茨城県鹿島郡鉾田町徳宿出身、カナーン駅カナーン耕地に配耕された。後年グァルーリョス市に在住する。　(「つくばね 13 号」49 ページ)

＊大貫義男、妹根本文枝、1932 年 8 月、ブエノス･アイレス丸、茨城県西茨城郡友部町大字仁古田出身、カナーン耕地に配耕された。後年聖市在住。(「つくばね 13 号」31 ページ)

＊菅原五右衛門、1933 年、アラビア丸、岩手県西盤井郡、1 年間コロノ生活を過す、当時世界的な不況でコロノは食うにも事を欠く有様の頃であった。(「活躍する日系人」53 ページ)

＊岩野高史、1933 年 2 月、ブエノスアエレス丸、熊本県上益郡、ジャタイー駅カナーン耕地に配耕、起床ラッパならぬ鐘の音に依って起された。(「熊本県人発展史」656 ページ)

(注記)
カナーン駅からのカナーン耕地入りと、またジャタイー駅からのカナーン耕地入りになると、その間には高い石山があり大きく迂回する。私 (林) は近年 3 度(2005 年 10 月)このカナーン耕地を訪ねる。ジャタイー駅からのカナーン耕地であるなら耕地中心地まで 3 ～ 4 キロであり、カナーン駅からこの耕地になると 10 キロ以上の道程と思える。ただこの耕地も幾つかに分けて売られているので、疑問内容を場内の人々では解明できなかった。

＊三浦酉松、1933 年、ラプラタ丸、岩手県閉伊郡大槌町出身、カナーン耕地に入耕就労後、タクワリチンガ郊外フィゲーラに移転トマト栽培を業とする。(「ブラジル日系紳士録」)

＊津田万三郎、1933 年、アリゾナ丸、北海道川中郡池田町出身、ジャタイー駅サン・ジョン耕地で就労すること２年３ヶ月、以後パラナ州に移転、トレスバラス移住地の邦人耕地でコーヒー栽培契約農を終えてジャンガーダ区に入植する。(「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」655 ページ)

＊高宮高治、1933 年 10 月、ラプラタ丸山形県村山郡楯岡町出身、カナーン耕地米作に従事後、タクワリチンガ市フィゲーラに移転蔬菜雑作に従事。(「ブラジル日系紳士録」689 ページ)

＊仁田原幾次、1933 年 11 月、ブエノス・アイレス丸、福岡県八女郡大淵村出身、ジャタイー駅サン・ジョアキン耕地で義務農年遂行後、バレイロ耕地に移転する。以後７ヶ年の綿作生活で６ヶ所移転を繰り返した。後年パラナ州トレスバラス移住地アモレーラ区に入植する。
(「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」360 ページ)

＊藤中英正、1933 年２月、ブエノスアエレス丸、山口県出身、配耕２年就労後バウール管内に 15 年就労、さらにドウラードス市に移転。(「ブラジル日系紳士録」924 ページ)

＊内山文男、1934 年４月、ハワイ丸、群馬県沼田市池田町出身、子供の時両親に伴って渡伯。航海中船内でハシカが大発生、罹患して妹を含め十数人の児童が船内病室に隔離されて療養するが、私達兄妹だけが快復する。カナーン耕地に配耕され８ヶ月の就労であった。転じて後年ジュキーア地方で養蚕飼育をした。多い年には 300 ｇも掃立をする。生繭でカンピーナス市のマタラーゾ製糸会社に出荷した。日本にいても大戦で出征したと思う。従兄弟の半分が戦死したので、運がよければ生きていたと思うが、ブラジルに移住していたのでその心配はなかった。

＊岸野武彦、1934 年７月、マニラ丸、宮城県石巻市門脇町出身、カナーン駅グァラミア耕地に１年の義務農年終了後、パウリスタ延長線に就労すること２ヶ年。その後借地農を始める。自分の農地を求めてパラナ州トレスバラス移住地セードロ区に落着く。(「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」378 ページ)

＊斉藤兵三郎、1934 年 10 月、アリゾナ丸、山形県東置賜郡出身、サン・ジョアキン耕地配耕コーヒー園に就労、以後転々してバウルー郊外在住。(「ブラジル日系紳士録」463 ページ)

＊松本昌、1935 年３月、アリゾナ丸、愛知県瀬戸市出身、カナン耕地に配耕、さらにソロカバナ線アグードス移転、1952 年サンパウロ総領事館勤務。(「ブラジル日系紳士録」215 ページ)

＊田村晴雄、1935 年４月、サントス丸、福島県相馬郡高平村出身、カナーン耕地に就労するが、農事に経験なく４ヶ月で移転。渡伯８年で７回も移転した。パラナ州に移転後数度転じてトレスバラス移住地パルミタル区に漸く落着く。(「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」578 ページ)

＊松山慎次郎、1937 年３月、モンテビデオ丸、高知県香美郡夜須町出身、村上春吉氏の家族構成員、ジャタイー駅リモエーラ耕地に配耕義務農年遂行後、ジュンジャイ市でホテル兼バール経営したが、４ヶ月で村上氏が

死亡したので 2 ヶ年で廃業した。転々して 1957 年グァイラ市に移転。
(「ブラジル日系紳士録」869 ページ)

＊成宮士源生、1938 年 2 月、滋賀県長浜市平方町出身、ジャタイー駅サン・ジョアキンに就労、義務農年終了ご聖市に移転、以後一環してこの地に留まる。(「海を渡った近江の人たち」288 ページ)